The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「かわいい」の心理学 : 現状と展望
Author(s)	入戸野, 宏
Citation	心理学評論. 2025, 68(3), p. 201-206
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103657
rights	© 2025 心理学評論刊行会 the Society of Japanese Psychological Review
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Japanese Psychological Review
2025, Vol. 68, No. 3, 201–206

「かわいい」の心理学：現状と展望[1)]

入戸野　　宏
大阪大学

1. はじめに

1.1 「かわいい」の心理学の誕生

日常生活でよく見聞きする「かわいい」という言葉には，不思議な魅力がある。親しみやすく楽しそうな雰囲気があるが，「かわいい」とはいったい何であり，私たちにとってどんな意味を持つのだろうか？

「かわいい」に対する社会の態度は，時代とともに変わってきた。1980年代半ば，若い女性が「かわいい」を多用しはじめたころは「B級文化」とみなされていた（増渕，1994）。その後，日本が世界に誇るポップカルチャーとして持ち上げられるようになり（櫻井，2009），歴史をさかのぼる形で人文学的な考察も行われるようになった（古賀，2009；四方田，2006）。キャラクターをあしらった少女向けの商品は1970年代から存在したが，2000年前後になると民間だけでなく官公庁までもがさまざまなマスコットを作りはじめた。「キモかわいい」や「ブサかわいい」といった不思議な複合語がメディアに登場するようになり，流行やファッションに関心のない層にも「かわいい」が浸透していった。このあたりの経緯は多くの識者が述べているとおりである（例えば，高馬，2025）。

著者が「かわいい」について心理学・行動科学の視点から考えはじめたのは2007年である。そのころ，「かわいい」に対する社会の好意的関心は高まっており，さまざまな分野の研究者が検討をはじめていた。学部生から尋ねられて調べてはみたものの，当時，科学的心理学の視点から「かわいい」について説明したものはほとんどなかった。動物行動学者コンラート・ローレンツが提唱したベビースキーマ（Kindchenschema）というアイデア―幼児にみられる身体的特徴を愛らしいと感じる生得的な仕組みが人間には備わっている―は広く知られていたが（Lorenz, 1965 丘・日高訳 1989），「かわいい」文化とは体系的に結びつけられていなかった。

そこで，「かわいい」に関係する文献を集めるとともに，大学生を対象にいくつかの調査を行い，その成果を紀要論文にまとめた（入戸野，2009）。この論文では，「かわいい」は日本独自の文化であるという言説に対して，行動科学の観点から「『かわいい』の二層モデル」を提案した。まず，日本語辞典に依拠して，「かわいい」は属性を表現する言葉としても，対象に出会ったときの感情を表現する言葉としても使われることがあると示した。その上で，その感情には生物学的な基盤があると想定し，これは保護や見守りといった社会的動機に関連したポジティブな感情であり，おそらく幼児に対する愛情から派生したものと考えた。日本にはその感情を受容する文化的特徴（甘えや縮み志向など）があり，それが現在の「かわいい」文化の隆盛につながっていると提案した。このように考えると，「かわいい」に関する心理の普遍性と，地域や時代によって異なる特殊性の両方を考慮しながら，科学的心理学の視点に立って実証的な研究ができるようになる。

その後の研究は，この紀要論文の内容を具体化させる形で発展した。対象が持つかわいさという属性を知覚すること（かわいさ知覚）と，対象と自分との関係性を認知的に評価してかわいいと感じること（かわいい感情）とを分けて捉える枠組みを整理し，かわいい感情が社会的に増幅されるというアイデア（かわいいスパイラル）と併せて，英語の解説論文にまとめた（Nittono, 2016a）。この論文は，ジョシュア・ポール・デール氏（本特集号にも寄稿している）が企画した *East Asian*

1)　本稿を取りまとめるにあたり，JSPS科研費JP21H04897の助成を受けた。

Journal of Popular Culture 誌　の「Cute studies: An emerging field」という特集号に掲載された。その内容をもとに，2016 年 7 月に横浜で開催された第 31 回国際心理学会議（ICP2016）で「“Kawaii” as an emotion: Understanding the effects of cuteness on human cognition and behavior」という講演を行った（Nittono, 2016b）。また，一般向けの書籍も執筆した（入戸野，2019）。

これらと並行して，実証的な研究も進めた。かわいさ知覚については，日本の 6 ヶ月児の顔をベースにした刺激データセットを作成した（Nittono, Ohashi, & Komori, 2022）。かわいい感情の性質については，行動反応や表情筋活動を測定する実験を行った（Nittono et al., 2012；Nittono & Ihara, 2017；Nittono & Ohashi, 2024）。「かわいい」の二層モデルに関しては，「かわいい」に類似した外国語の形容詞について，その印象や適用範囲を比較する国際調査を実施した（Nittono, Lieber-Milo, & Dale, 2021；Nittono et al., 2023）。kawaii という言葉を心理学の英語論文のタイトルで初めて使用したのは Nittono et al.（2012）であるが，こうした活動が実り，kawaii は科学の分野でも徐々に認知されるようになった。たとえば，かわいさに関する認知神経科学の解説論文でも kawaii がキーワードとして取り上げられている（Kingelbach et al., 2016）。

1.2 「かわいい」研究の面白さと難しさ

「かわいい」研究が面白いのは，専門家だけでなく，誰でも一家言を持っていることである。老若男女が自分の経験や感覚を通して語れる研究テーマというのはそう多くない。このテーマは多くの人々の興味に応えられるという点で，社会とのつながりを持っている。また，なじみのある事例から出発して，専門分野（著者の場合は実験心理学）を分かりやすく紹介することもできる。

その一方で，この親しみやすさによって，研究上のやっかいな問題が生まれる。「かわいい」という言葉でイメージする内容は人によって少しずつ異なるため，議論がかみ合わないことがよく起こる。また，「かわいい」という日本語のニュアンスを他の言語に翻訳するのは難しいといわれることもある。海外の人々に対して，なぜ翻訳が難しいのか，何が違うのかは，具体的に説明できたほうがいいし，それができれば，国内における議論もスムーズになるだろう。

言葉に頼りすぎると共通理解が困難になる。この問題に対する一つの解決策は，「刺激とそれに対する反応」という枠組みで考えることである。たとえば，イヌやネコなどの愛玩動物の写真や動画は，少なくとも近代化した社会においては似たような感情反応を引き起こす。感情反応は，主観報告だけでなく，表情などの身体状態の変化としても測定できる。客観的な刺激と客観的な反応という組み合わせで考えれば，言語の壁を超えられる。つまり，「かわいい」という語を使わずに，「かわいい」に関連した研究を行うことができるのである。それでも，その現象を論文として発表するときには，kawaii と表現するのか，cute でもいいのかといった言語の問題に改めて直面することになる。

1.3　企画の趣旨

「かわいい」の心理学に関連した研究は世界的にも増えているが，個々の研究者がそれぞれの分野で実施していることが多く，全体像が見えにくい。そこで，本特集号では，著者が研究代表者として実施している科学研究費補助金「『かわいい』感情の効用とその実社会応用に関する研究」（基盤研究（A）2021–2025 年度）に参画している研究分担者やこれまで交流のあった先生方に，それぞれの分野やテーマにおける「かわいい」研究の現状について執筆を依頼した。「かわいい」という概念の多様性を尊重し，用語や定義の統一はあえて行わず，内容もそれぞれの著者にゆだねた。

2. 特集号の構成

2.1　論文

本特集号には，8 本の論文が掲載されている。最初の 2 つは，「かわいい」とは何か，人間にとってどんな意味があるかという全体的な問題を扱っている。井原・入戸野論文では，文献データベースから「かわいい」に関連した論文をキーワード検索し，かわいいものを見た後に生じる現象（主観的，行動的，生理的変化）に焦点をあてたレビューを行っている。英語で発表された論文が対象なので，現在世界で行われている研究の動向を理解できるだろう。藏口論文では，かわいさの知覚と

かわいいものに接したときの効果（かわいい効果）について解説している。「かわいい」に関するユニークな実験を行ってきた研究者の視点から，コンパクトにまとめられている。

続く小森論文では，かわいいと知覚される刺激の要素を個人の評定データに基づいてボトムアップ的に抽出する方法について論じている。この方法を使えば，かわいい形やかわいい色とは何かという問いに具体的に答えることができる。多数の次元からなる物理量と心理量との関係を個人ごとに推定することにより，かわいさ知覚における共通性と個人差を同時に検討できると期待される。

次の4つの論文は，「かわいい」に関連したさまざまな話題を扱っている。金井論文では，かわいい写真を取り入れた瞑想（メンタルトレーニング）の効果について，その母体である「慈悲の瞑想」や「マインドフルネス瞑想」などの手法と比較するとともに，背後に想定される仕組みについても考察している。塩見論文では，ロボットの設計と実装における「かわいい」の役割や活用法について，実証的な研究に基づいて論じている。高松論文では，子どもと養育者の関係における「かわいい」の役割について，養護欲求に注目した研究を紹介している。熊谷論文では，言語学，特に音表象の観点から，かわいいと感じられる言葉の響きを調べた研究を紹介し，「かわいい」言語学を提唱している。このように「かわいい」の心理学は，「かわいい」とは何かという問いを超えて，さまざまな分野に広がっている。

最後のデール論文では，アメリカの「キュート」美学の誕生と展開について，日本の「かわいい」と関連させて論じている。デール氏は，これまでもグローバルな視点から，かわいさの美学に注目してきた。今回は，特集号のために書き下ろしていただいた原稿を翻訳した。同氏の「かわいい」関連の著作では初めての邦訳である。「キュート」と「かわいい」が生まれた背景の違いが紹介されている。

2.2　コメント

本特集号では，3名の識者にコメントを依頼した。掲載予定の8つの論文の原稿をすべてお渡しした上で，思うところを自由にお書きいただいた。

社会心理学が専門の浦光博先生は，著者が「かわいい」の心理学をはじめた当初から，折に触れて助言をくださっている。「かわいい瞑想」というパワーワードも，浦先生が同席していた研究会で初めて創出されたものである。今回は，「キモかわいい」という概念が，相反する感情が同時に生じる混合感情の理解にどのように貢献するかを考察した試論を書いていただいた。

比較行動学が専門の川口ゆり先生は，霊長類を対象としたベビースキーマの研究を続けている若手研究者である。後述するように，ベビースキーマという概念は，実証的な裏づけが弱いまま，独り歩きを続けてきた。ローレンツ自身は「人間のベビースキーマ」という表現をすることで，人間が持つ生得的解発機構の例として紹介している。生物学的な行動だからといって，他種の動物と共有されているわけではない。その線引きを行うためには，地道な研究の積み重ねが欠かせない。

感性工学が専門の大倉典子先生は，かわいいモノづくりの研究に長年取り組んできた第一人者である。私が研究をはじめたころも「かわいい人工物」に関する萌芽的な研究を学会で発表されていた。特集号に掲載される各論文について，感性工学者の立場からひとつずつコメントをいただいた。ある分野の研究者にとっては自明なことが，別の分野の研究者にとっては新鮮に見えることがある。「かわいい」という身近なテーマだからこそ，学問の垣根を超えて取り組むことができ，そこから新しい発想が生まれるのだろう。

3.　これからの課題

3.1　「かわいい」を取り巻く環境の変化

「かわいい」の心理学が誕生して20年ほどが経ち，社会の様子も当時とは変わってきた。日本では，ポップカルチャーや流行としての「かわいい」は下火になった。失われたというよりも，私たちの生活に溶け込んで同化したと考えることができる。かつて「かわいい」文化が盛んだったころの異質性や特別感が薄れてきた。その一方で，当時の文化や流行したグッズに新鮮な魅力を感じる若い世代も現れつつある。

海外では，かわいいものへの関心が高まっている。たとえば，2024年10月28日，ローマ教皇庁

（バチカン市国）は，2025年に祝われるジュビリー（聖年）の公式マスコットとして，Luce（ルーチェ）を発表した。巡礼者をモチーフにしたアニメ顔の少女で，日本のかわいいキャラクターの影響が一目で分かる。大阪・関西万博への参加を念頭に置いているとはいえ，厳格なイメージのあるカトリック教会が，若い世代へのアプローチを試みている。違和感を抱く人もいるかもしれないが，仏教でも「人を見て法を説く（対機説法）」というように，大切なメッセージを届けるには，その相手に適した方法があるはずである。日本語のkawaiiをきっかけとしながら，言葉そのものではなく，その背後にある精神を理解し共有していくことは，さらなる展開につながると期待される。

3.2　ベビースキーマの呪縛を超えて

言葉の壁を超えるためには，刺激とそれに対する反応という枠組みで考えることが有益であると先に述べた。かわいいものに関する研究で，ベビースキーマの概念が根強い人気を誇っているのはそのためである。母親が子に対して特別な感情を抱くことは古くから知られているが，そのような感情を引き起こす刺激要素をリストにして示したのはローレンツが初めてだった。

もともとは個人の内省に基づく記述であり，実証データに裏づけられたものではない。しかし，説明に用いられた図が直感的に分かりやすかったこともあり，無批判に受け入れられたり，意図せず改変されたりしてきた。たとえば，「目が大きいほうがかわいい」と言われることがある。子どもの顔はおとな顔と比べて目が大きめであるし，ミッキーマウスは年を追うごとに目が大きく描かれるようになったという事例もある（Gould, 1979）。しかし，ベビースキーマの原典では，目の大きさは単独の要素としては取り上げられていない。「大きくて，（張り出した額の）奥にある，頭蓋骨の中央より下に位置する目」と書かれており，大きさと位置の両方に言及されている。目が大きいアニメ顔のキャラクターもいるが，ハローキティやミッフィーのように目はただの点として描かれることもある。それでも，かわいさが損なわれるわけではないだろう。

直感的に分かりやすい説明が正しいとはかぎらないという最近の例として，縄文時代の土偶に関する新説がある。在野の人類学者である竹倉史人氏は，『土偶を読む』（2021）という著作のなかで，人間離れした不思議な姿の土偶は，当時の人が食べていた植物や貝の形を人体化した（物体に手足をつけてフィギュア化した）ものであるという仮説を提唱した。土偶と植物の実の写真を並べてみると，確かにそのように思えてくる。この著作は，多くの著名人に絶賛され，第43回サントリー学芸賞（社会・風俗部門）も受賞した。しかし，考古学の専門家によると，発想は面白いものの，解釈が恣意的であり，学術的な価値はほとんどないという（縄文ZINE，2023）。ローレンツの主観からスタートしたベビースキーマにも，これと似た性質があるかもしれない。

今後は，ベビースキーマという概念がどこまで正しいのかについて批判的かつ実証的に検討していく必要があるだろう（川口コメント論文を参照）。近年では，個体の特徴であるベビースキーマ以外にもかわいいと感じられる要素があることが分かってきた（塩見論文を参照）。こうした研究が積み重なることで，ベビースキーマに限定されない包括的な「かわいい」理論が生まれてくるだろう。

3.3　批判への対応

現代の日本では，「かわいい」を良いものとみなす傾向が強い。しかし，英語の「cute」には，自分の利益のために他者を操るというイメージが付きまとっている（デール論文を参照）。かわいいものは親しみやすさを感じさせるため，人の懐に入り込んで，その人の行動や態度に影響を与えることができる。Kringelbach et al.（2016）は，これを「トロイの木馬」と表現している。

このような性質は悪用できるので，批判の対象となることもある。しかし，冷静に考えると，それは「かわいい」に内在する問題ではない。かわいいものは親しみやすさを感じさせるが，相手との心理的距離が縮まるのは悪いことではない。それを利用して，相手を操作・支配しようとすることが問題なのである。かわいさを武器にして他者を操るというケースとは反対に，ベビースキーマが想定する「保護する人 – 保護される人」という一方向的な関係性から，相手を従属的に見なしてしまうこともあるだろう。かわいさに対する海外

の批判的態度には，このような権力性への反発が感じられる。日本語の「かわいい」も，最初は目上の者が目下の者に対して使う表現であったので，他者からかわいいと言われると「見下されている」と感じる人もいる。しかし，現代語の「かわいい」は，海外の類似概念に比べて，より幅広い対象に汎用的に使われるのが特徴である（Nittono et al., 2023）。そのため，上下関係だけでなく水平方向のつながりまでも含むことができる。支配と服従の観点だけで「かわいい」を語るのはあまりに惜しい。「かわいい」がもたらす潜在的な悪影響に気づいていれば，そのポジティブな側面をさらに伸ばしていくことができるだろう。

これに関連したもう一つの懸念は，見た目を偏重する傾向が強まっていることである。SNSや動画共有サイトなどのソーシャルメディアに加え，生成AIサービスの発展・普及に伴い，表面的なかわいさが氾濫するようになった。これは，デジタル時代の「かわいい」の特徴ともいえる。しかし，「かわいい」には，見た目だけではなく，自分がどう感じるかという感情の側面もある。表面的なかわいさを消費するだけではなく，自分自身の身体感覚としての「かわいい」を取り戻していくことが，これからの時代の課題かもしれない。

4. まとめ

2025年10月21日，高市早苗氏が女性初の内閣総理大臣に就任した。就任直後の外交の場で終始見せていた笑顔が印象的だった。その姿に未来への希望を感じた日本人は少なくないだろう。笑顔はベビースキーマではないかわいさの代表的な要素であり，親しみやすさや近づきやすさにつながる。「媚びている」「海外の女性リーダーではありえない」といった意見もあったが，著者が見るかぎり，とても日本らしい「おもてなし」であり，スマートなふるまいだった。「柔よく剛を制す」というように，険しい顔で対立するのではなく，積極的に笑顔を見せることで場を和ませ，双方に利益のある目標を達成する。力と力，正義と正義をぶつけあって戦うことが解決をもたらさないことは，昨今の世界情勢が示している。しなやかな「かわいい」外交の可能性を感じた。

およそ20年間の研究を通じて，「かわいい」についての心理学的理解はある程度進んできた。今後は，ベビースキーマの概念や日本独自の文化という発想，さらには「かわいい」「kawaii」という言葉そのものも乗りこえて，背後にある人間の心の仕組みに注目した研究が進み，その成果が社会で活用されることを願っている。本特集号がその一助となれば幸いである。

文　献

縄文ZINE（編）（2023）土偶を読むを読む　文学通信.

Gould, S. J. (1979). Mickey Mouse meets Konrad Lorenz. *Natural History*, *88*, 30–36.

古賀令子（2009）「かわいい」の帝国―モードとメディアと女の子たち―　青土社.

高馬京子（2025）日本とフランスのカワイイ文化論―なぜ私たちは「かわいく」なければならなかったのか―　明石書店.

Kringelbach, M. L., Stark, E. A., Alexander, C., Bornstein, M. H., & Stein, A. (2016). On cuteness: Unlocking the parental brain and beyond. *Trends in Cognitive Sciences*, *20*, 545–558.

Lorenz, K. (1965). *Über tierisches und menschliches Verhalten: Aus dem Werdegang der Verhaltenslehre*. Piper（ローレンツ, K. 丘直通・日高敏隆（訳）（1989）動物行動学II　思索社）

増淵宗一（1994）かわいい症候群　日本放送出版協会.

入戸野宏（2009）“かわいい”に対する行動科学的アプローチ　広島大学大学院総合科学研究科紀要I 人間科学研究，*4*, 19–35.

Nittono, H. (2016a). The two-layer model of “kawaii”: A behavioural science framework for understanding kawaii and cuteness. *East Asian Journal of Popular Culture*, *2*, 79–95.

Nittono, H. (2016b). *“Kawaii” as an emotion: Understanding the effects of cuteness on human cognition and behavior* [Invited Address]. 31st International Congress of Psychology (ICP2016), Yokohama, Japan (IA27-21).

入戸野宏（2019）「かわいい」のちから―実験で探るその心理―　化学同人.

Nittono, H., Fukushima, M., Yano, A., & Moriya, H. (2012). The power of kawaii: Viewing cute images promotes a careful behavior and narrows attentional focus. *PLOS ONE*, *7*, e46362.

Nittono, H., & Ihara, N. (2017). Psychophysiological responses to kawaii pictures with or without baby schema. *SAGE Open*, *7*. https://doi.org/10.1177/2158244017709321

Nittono, H., Lieber-Milo, S., & Dale, J. P. (2021). Cross-cultural comparisons of the cute and related concepts in

Japan, the United States, and Israel. *SAGE Open*, *11*. https://doi.org/10.1177/2158244020988730

Nittono, H., & Ohashi, A. (2024). Considering cuteness enhances smiling responses to infant faces. *Japanese Psychological Research*, *66*, 462–472.

Nittono, H., Ohashi, A., & Komori, M. (2022). Creation and validation of the Japanese Cute Infant Face (JCIF) dataset. *Frontiers in Psychology*, *13*, 819428.

Nittono, H., Saito, H., Ihara, N., Fenocchio, D. N., & Andreau, J. M. (2023). English and Spanish adjectives that describe the Japanese concept of kawaii. *SAGE Open*, *13*. https://doi.org/10.1177/21582440231152415

櫻井孝昌（2009）世界カワイイ革命―なぜ彼女たちは「日本人になりたい」と叫ぶのか―　PHP 新書.

竹倉史人（2021）土偶を読む― 130 年間解かれなかった縄文神話の謎―　晶文社.

四方田犬彦（2006）「かわいい」論　ちくま新書.

― 2025. 11. 17　受理 ―